

所より山路の峻を凌て西北へ廿町許ゆきて荒澤の山上に至る。夫より路を左に取て尖岩を涉り、右の方なる山峯を見れば、危石忽に落るが如き岩下を越て、瀧の傍に至る。茲に荒澤不動の石像有て脇に籠堂あり、此所は瀧の横手ゆゑ、正面を望には瀧の裏を潛り行て、向の方へ廻り見ることなり。偕其瀧口は盤石凡一間餘差出たる上より、瀑水激流して水幅六七尺、其岩石の差出たる下は道幅四尺許、高さ六七尺あれば、瀧の裏を潛り透るに患ひなし、誠に希代の飛瀑なり、係る名勝なる瀑水を、八景の内に入ざりしは、うらみといふ唱へを嫌はれたる歟。

〔木曾路名所圖會^六〕裏見瀧

此瀑布泉高さ十四五間許、幅二間餘、岩窟の間より飛流し、向ふの方へ走る猛獸の勢ひに似たり、傍より巖々たるをつたひて道を下れば、かのさし出たる岩窟の本にいたる、此飛泉をうらより見るによつて名とす、上に荒澤不動明王立給ふ、凡天下に飛泉多しといへども、うらより見る瀧はこゝに限るなり、范希文が廬山の瀧の詩に、白虹澗に下て飲、寒劍天に倚て立とは、此あたりの事なるべし。

〔奥の細道〕卯月朔日、御山に詣拜す、往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基のとき日光と改め給ふを、^略中二十餘丁山を登りて瀧あり、岩洞のいたゞきより飛流して、百尺千巖の碧潭に落ちたり、岩窟に身をひそめ入りて瀧のうらより見れば、裏見の瀧と申傳へ侍るなり、

まばらくは瀧に籠るや夏の初め

〔日光山志^三〕霧降瀧 小倉山の麓を通り、北の山合を或は登り或は下り、凡一里餘を経て山頭に至り、夫より瀧のもとへ坂路一町餘下りて、落來る瀑布を望に、高五六拾間も有べき山上より飛流する水末、數級の岩石に當り、くだけ散すること、烟霧の如し、ゆゑに霧降の名起れり、

〔東山志^上〕中畑新田 矢吹まで十八町^略中

霧降瀧

岩代國
龍崎瀧